

浄土宗西山禅林寺派

潮音寺だより

<http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/> ナモの寺 検索
〒456-0034 名古屋市熱田区伝馬一丁 10-11

第337号
平成23年11月

電話 052-671-4831

ファクス 052-671-4856

choonji@aichi.email.ne.jp



【出典】『十七条憲法』 聖徳太子
 二に曰く、篤く三宝を敬え。
 三宝とは仏と法と僧なり。

篤く三宝を敬え

三宝とは
仏法僧なり

教えたたまえる仏
説きたまえる法

つまり

すべてのものは
変化し移りゆくという
諸行無常

すべてのものは
わがものにあらずという
諸法無我

この二つの真理を覚る
こころの平安

涅槃寂靜

その法を伝えたまえる
僧の三なり

篤敬三宝

iPhone・iPadで人気の高いアップル社の創業者、スティーブ・ジョブズ氏が、十月五日死去されました。彼には、熱狂的なファンが多くなります。便利で当たり前のように使っているマウスや、最近流行の指で伸びたり縮んだりするマルチタッチは、彼の発案によるものだそうで、ファンならずとも、多くの人が彼の恩恵に浴していることとなります。まだ五六才、あまりに早い天才の悲報に、オバマ米国大統領始め、世界中から哀悼コメントが寄せられています。

二〇〇五年、スタンフォード大学の卒業式での伝説の講演があります。要点は次の三つです。

① **点と点を繋ぐ**。自分の根性・運命・人生・業、何でもいいから、とにかく信じること。歩む道のど

こかで点と点がつながると信じれば、自信を持って思うままに生きることが出来る。たとえ人と違う道を歩んでも、信じることで全てを変えてくれる。

② **愛と敗北**。人生には頭をレンガで殴られるような時がある。しかし、信念を失わないこと。私がかまで続けてこられたのは、自分がやってきたことを愛しているからに他ならない。

③ **死を意識する**。毎朝、私は鏡に映る自分に問いかけてきた。「もし、今日が人生最後の日だとしたら、今日やる予定のことは、私が本当にやりたいことだろうか」と。「ノー」の答えが何日も続けば、何かを変える必要があるということだ。死を意識するということは、「何かを失うかもしれない」という思考のわなに陥るのを防ぐ最善

の方法である。

以上ですが、彼を語る上で忘れてはならない人物がいます。彼の結婚式を司り、創業したアップル社を解任された後、新たに設立したネクスト社の宗教指導者として迎えた、禅僧の乙川弘文師です。

二人の関係は、乙川師が事故で亡くなるまで深く親交があったといい、「①点と点を繋ぐ」は仏教の基本的な教えである縁起、「③死を意識する」は、道元禅師の禅の教えが基調になっているのは、そこに由来すると思われる。

次に、日本の実業家、京セラ・第二電電（現・DDI）の創業者で、現在は、日本航空（JAL）の会長である稲盛和夫氏についてお話しさせていただきます。

二〇〇三年、「素晴らしい人生を送るために」と題して、ラジオ

深夜便で放送された珠玉の講演があります。要点は次の三つです。

① **心を磨く**。人生の目的は、死ぬ間際まで、受け継いだ魂を美しく磨き上げ、次に受け渡すこと。つまり、豊かな人間性を育むことである。

② **因果応報**。人生は、運命を縦糸とし、因縁を横糸として織りなされていく。善いことを思い、善いことをなせば、良い人生が授かる。これは証明しがたいが、運命を立命と変えた袁了凡の実録『陰陽録』や、ビッグバン理論を宇宙の進化仏の意思ととらえることによって領解しうる。

③ **善意をもって働く**。仕事に愛着を持ち、善意で働くことは、心を美しく、魂を磨くことになる。心が磨かれると、視界が開け、真実が見えるようになる。

以上、日米二人の実業家を紹介させていたいただきましたが、共通していることは、アップル・日本航空のCEO（最高経営責任者）でありながら、その報酬をもらっていないということ、仏教を経営の精神基盤としていることです。

一九〇五年、およそ百年前、ドイツの社会学者マックス・ヴェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を発表し、カルビニズムやピューリタニズムなどの**禁欲的**プロテスタンティズムの倫理が、近代資本主義の精神的支柱となったと論じました。

一方、**少欲知足**（欲を少なくして足るを知る）を説く仏教は、近代化に貢献するようなことはなかったとの批判があります。しかし、ここに来て資本主義経済の綻びがそこかしこに出てきていま

す。今こそ、仏教の出番であり、その良いお手本が、ステイブ・ジョブズ氏と稲盛和夫氏ではないかと思うのです。

ご存じ聖徳太子の『**十七条憲法**』の二を、改めて読んでみましょう。

二に曰く、篤く三宝を敬え。三宝とは仏と法と僧なり。則ち四生の終歸万国の極宗なり。何れの世、何れの人がこの法を貴はざる。人尤だ悪しきもの鮮なし、能く教うれば従う。それ三宝に帰せずんば、何をもつてか枉れるを直さん。

仏法こそ究極の教えであり、諸行無常・諸法無我・涅槃寂靜の三法印、そして、少欲知足の精神を、いつの時代にあっても、何人たりとも、聖徳太子が仰るように貴んでいかねばなりません。

◎仙人^{せんじん}

天狗と並んで「仙人」もまた正体が不明である。一般に我々は、不老不死の老人(?)とイメージする場合が多いが、実はこれは中国の道教から起こった発想。俗世間を離れて山中に暮らし(そのために「仙人^{せんじん}」の字も当てられる)、不老不死の法を収めて神変自在の術を心得た者を、道教では理想の人物と考えたためだ。

しかし仏教における仙人は、これと少しばかりイメージが異なる。世俗を断って山中にこもるまでは一緒だが、それはあくまで仏道修行のため。そのため、仙人イコール修行者、となるのだ。不老不死の秘法を授かったとしたら、その人物は即仏になると考えていい。そんなことは、実理的な考えを基

調とする仏教ではありえない。

そこで仏教では、仏が不老不死であるため、仏そのものを仙人と呼んだりもする。

ちなみに植物のサボテンを漢字に直すと「仙人^{せんじん}掌^{しょう}」。仙人の手は、ああもゴツゴツしているのだろうか? (『仏教のことは』ひろさちや監修)

雑記



▼南極物語

テレビドラマで、『南極大陸』の放送が始まりました。当時、小学校の講堂で、日本最初の南極観測船^{そうごう}宗谷^{むねや}が、氷に閉じ込められ、ソ連の砕氷艦^{さいへいせん}オビ号^{おびごう}に助けられるという記録映画を、固唾^{かたず}を呑^のんで観ていたことを思い出しました。

宗谷は、最初の名はボロチャエベツ。ソ連の発注によって造られ、と

ころが、第一次世界大戦直前のこと、ソ連へ引渡されず、商船地領丸^{じりやうまる}として竣工し、その後、海軍所属の特務艦宗谷^{そうご}と名を改め、あのミッドウェー海戦にも参加したとか。戦後は、海上保安庁の巡視船、そして、南極観測船として六回任務を遂行。後継のふじに譲つてからは再び、巡視船として、多くの人命救助にも携わり、昭和54年からは、東京お台場で一般公開されているとのこと。これほど波瀾万丈の船も少ないのでは……。

▼木守柿(きもりがき)

秋の俳句の季題。収穫せずに、そのまま残しておく数個の柿の実のこと。来年の豊作への祈願であるとも、野鳥のために残しておくとも。なかなか趣深い、伝え残していききたい日本の風習ですね。

◆朱^{あか}く熟^うれ梢^{こずえ}にふたつ木守柿 沐魚